



# 佐野史郎さんが八雲朗読ライブ

雲南市の市制施行10周年を記念した「うんなん幸あり祭」が1、2の両日、同市三刀屋町古城のアスパルで開かれる。松江市出身の俳優佐野史郎さん、ミュージシャン山本恭司さんによる「小泉八雲 朗読

## あす雲南 アスパル

ライブ「神話」は古事記に導かれ訪れた地で出会った神々など多彩な催しがある。イベントは、人、自然、歴史、食の魅力を発信し産業振興、交流人口拡大につなげようと市やJA雲南、市商工会

山本恭司さんが  
ギター演奏披露

## 小泉凡さん講演も

品販売コーナーなどが設けられる。朗読ライブは2日午後5時開演。2部構成で1部は文豪・小泉八雲のひ孫で島根県立大学短期大学教授の小泉凡さんが「小泉八雲と出雲神話」と題して講演。朗読は2部で、八雲の作品の一節を佐野さんの語りと山本さんのギター演奏で披露する。定員200人で入場料は一般3千円（前売り2500円）。チケットはアスパルと市内のチェリヴァホール、ラメールなどで取り扱っている。問い合わせは実行事務局の市商工観光課、電話0854(40)1054。



小泉八雲ゆかりのアイランド音楽を奏でながら練り歩く楽隊

## 小泉八雲をしのび アイランド音楽

琴浦・八橋

明治の文豪・小泉八雲（ラファディオ・ハーン、1850～1904年）が訪れた琴浦町八橋でこのほど、八雲が育ったアイランドの音楽を楽しむ「小泉

八雲とアイランド音楽の夕べ」が開かれた。県内外から訪れた多くの来場者は民族音楽に浸り、八雲に思いをはせた。

八雲は妻・セツと1891年夏に八橋を訪れ、日本海が見渡せる中井旅館に宿泊、海水浴を楽しんだ。知人への手紙には「八橋は静かできれいです。宿屋も他のどこよりもよい宿です」としたためた。

八雲とのゆかりに着目した住民団体「琴ノ浦まちおこしの会」が2012年から夕べを主催している。こゝとは初の試みとしてパレードを開催。民族音楽を奏でながら歩く楽隊に住民らが拍手を送った。かつての酒蔵を会場とした演奏会には県内外から100人超が集まった。来場者はどこか懐かしさの漂う音楽に身を委ねながら、琴浦名物の牛

骨ラーメンやあこ方ツバーガーに舌鼓を打った。ほとんどの予想以上の人出だった。来年も新たな趣向を凝らして開催したい」と話し「会場の席が足りなくなる

# 文化

七草に入りたきさまの野菊  
かな  
頂上や殊に野菊の吹かれ居  
り

野菊を詠んだこの2句は  
現在の出雲市の出身で、近  
代俳句を代表する原石鼎  
(1886~1951年)  
の作品である。特に「頂上  
や」の句は有名である。  
「七草に」が石鼎18歳の時  
の作、「頂上や」を詠んだ  
時には28歳になっていた。  
野菊2句の間のいわば習作  
期の石鼎像については、こ  
れまでほとんど顧みられる  
ことがなく、このたび出版  
された寺本喜徳氏の『島根

△岩田 英作△

## 『島根県近代文芸史稿』の刊行に寄せて 明治の作家の活動実証

が1903(明治36)年の  
作であることも寺本氏の緻  
密な調査によって判明した

県近代文芸史稿』において  
初めて明らかにされた。  
そもそも「七草に」の句



『島根県近代文芸史稿』

ことであり、これまではそ  
れより2年前の石鼎16歳の  
作と考えられていたのであ  
る。この一事をもつてして  
も、本書の成果の一端を十  
分にうかがい知ることがで  
きる。  
やや先走って石鼎論の部  
分を取り上げたが、本書の  
考察対象は無論もつと広  
い。東は出雲大社の杵築歌  
壇、西は津和野の藩校養老  
壘と交流のあった須藤鐘一

(1886~1956年)、(明治15)年より60年間続  
く邑郡出身で『明星』誌上  
で活躍した河野翠漱(18  
84~1941年)につい  
て、それぞれの文学活動が  
個人年譜とともに論じられ  
ている。いずれも島根の文  
芸振興を支えた人物である  
が、その詳しい足跡につい  
ては本書によって初めて知  
ることができるようになっ  
た。たとえ近代文芸史上に  
名を残すメジャーな作家で  
なくても、当時の日本の文  
芸を支えた一つ一つの地上  
の星として、地方の名もな  
き文学青年たちの活動はも  
っと尊ばれてよい。その意  
味でも、本書の果たす役割  
はきわめて大きい。  
本書の達成の背景には、  
『山陰新聞』がある。『山  
陰新聞』は『山陰中央新報』  
の前身にあたり、1882  
(島根県立大学短期大学  
部総合文化学科学教授)  
(山陰文芸協会・4968  
頁)

街角

トピックス

松江

◆学生や入院患者がコンサート 松江市上乃木5丁目、国立病院機構松江医療センターでこのほど、ふれあいまつりが開かれ、県立大短期大学部（松江市浜乃木7丁目）



の学生の演奏会やセンター職員と入院患者のコンサートなどがあり、にぎわった写真。

近隣住民や患者の家族ら約600人が訪れた。県立大短期大学の吹奏楽部員2人がサククスで「宙宙戦艦ヤマト」などを披露。観客は手拍子をして、リズムに合わせて体を揺らした。

同センター職員が演奏するキーボード、ギターに合わせ、患者が「ベストフレンド」や「上を向いて歩こう」などを熱唱。大きな拍手が贈られた。徳島武院長は「大勢の人が訪れ、予想以上に盛り上がった」と話した。

出雲

舞のリーフレット製作

古里の伝統芸

河下獅子舞を紹介するリーフレット



能を知ってもらおうと、出雲市河下町の鱈淵コミュニティセンターが、地元で長年受け継がれる河下獅子舞を紹介するリーフレットを製作した。河下獅子舞の起源は不明だが、江戸期の1833（天保4）年には舞われていた記録が地区の古

文書に残る。鳥居舞から始まり、さらの舞で終わる9段構成で、3人が獅子役を務め、先頭の1人が獅子頭を着ける。鼻高面を着けた番内を先導に笛や太鼓などのはやしに合わせ舞う。現在は地元の河下獅子舞保存会が、毎年10月の第三日曜日にある河下町の意保美神社と垂水神社の例大祭で奉納している。A4判、両面カラーの三つ折りで、歴史や各段の舞の所作を写真で紹介。400部印刷し、約200部を同町の全世帯に配った。希望者には無料配布する。問い合わせは鱈淵コミュニティセンター、電話0853（66）0001。

「縁深い土地に生きて 3冊目の個人詩集であり、そして最後の詩集何にしてわすかでも紡ぎ出すかを考えて来まし

出雲の湖陵に暮らしながら、詩を書き続けた吉田靖治さんは、詩集『樹は』の「あとがき」に詩への思いをこう記して、今年の秋、79歳で他界した。9月20日に『樹は』の最終校正を終えて印刷業者に渡し、翌21日未明に息を引き取ったのだ。本書は吉田さんにと

って3冊目の個人詩集であり、そして最後の詩集となった。出雲を拠点に半世紀以上をわたって続いている詩誌「光年」。吉田さんは「光年」の古くからの同人で、「光年」に詩を発表することで「生きる気力」を培ったという（「光年」創刊50周年特集号）。「樹は」に収められている58篇の詩も「光年」に掲載した詩がベースとなっている。第2詩集の刊行からじつに40年ぶりの詩集となり、そこには吉田さんの後半生がおのずから反映している。

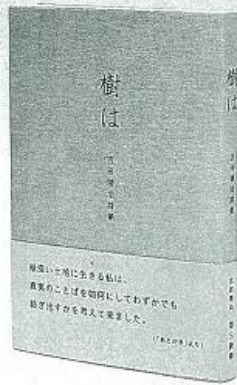
詩集はI～Vの5部構成で、Iでは「縁深い土地」で農を営みながら、自己のありか、言葉のあ

りかを求める「わたし」を経ていく。自然は、「わたし」と一体となっての姿が提示される。続く「たし」の一族を取り巻くカタリシスをもたらす。IIではそこに父母、祖父ながら、時に祈りの対象。母らに加わり、IIIで描かとなる。畏怖の対象となる娘や息子へとつながり、またある時には「わ

吉田靖治詩集『樹は』を読む

出雲の自然から真実紡ぐ

＜岩田 英作＞



吉田靖治詩集『樹は』

季節の移ろいと父と子と起きあがる。鶴を張りつめていて、咲こうとする歌をくり返す（花）。IVはアクセントが効いていて、読んでいてむせ返るようだ。「若葉の群」吉田さんの心に、木蓮の返るようだ。「若葉の群」おなぶりに響いたことたろ

「白い四肢」「うなじ」「ほの匂う耳」（月夜）、「秘めた流れ」「少女の形を残した女」赤い流

5歳の娘が描いた向日葵に雨が降りかかる。「そ」れら紙の上で雨にうたがしみた。無数の雨あとが描かれたものは、雨にそほ濡れながら娘ととも夏次の季節を秋を感じ浸り始めていくのであろうか。絵描きに夢中だった娘は寝て眠り込み父はそっと見守る。なりながら、風が手を抜

（「山陰詩人」同人）今井出版・1620円

# ご縁の旅「面白い」

## 県内学生がモニター体験

松江

県立大短期大学部（松江 市浜乃木7丁目）が学生を対象に募集した「キラキラドリウムプロジェクト」に採択された、「ご縁」をキーワードに県内の観光地を巡るモニターツアーが22日、2日間の日程で始まった。

「Let's 縁きりふれ

本唯さん（19）と営家みくさん（19）が企画した。

松江市立女子高時代に観光甲子園でグランプリを受賞した経験を生かし、「悪縁を絶ち、新しい自分に生まれ変わるなら松江」をコンセプトに設定。縁切りで知られる田中神社（同市鹿島町名分）や、「願い石」と「叶い石」で人気を集める玉作湯神社（同市玉湯町玉造）などを組み込んだ。県内の大学生や高校生ら

田中神社を参拝するツアーの参加者



4人が参加し、初日は田中神社や、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録されている「佐陀神能」で有名な佐太神社（同市鹿島町佐陀宮内）を参拝。「良い出会いがありますように」などと祈った。

参加者の一人、県立大総

合政策学部4年の木幡俊宏さん（22）は「地域に根差したツアーで、面白かった」と感想を話した。船本さんは「満足していただけで良かった」と喜んだ。アンケート結果を踏まえ、旅行会社と商品化も検討する。